

「猫が顔を洗うと雨が降る」という話を聞かれた事があると思います。

これは雲や空の色、あるいは動物の行動などから天気の子測を行う「観天望気」のひとつなのです。

天気のことわざのようなものですが、中には科学的にも十分信頼できるものもあります。世界的にみられるもののうち、太陽や月にかさ(暈)がかかると雨というものがあります。これは温暖前線の接近で、前線面にできた巻層雲によるものを示しています。

古くから天気は、漁師や農民などにとっては非常に重要なものであり、世界各地で観天望気が生まれたと思われます。特に海で生きる人々の間に多く伝承されているのは、天気の急変が命に直結しているからでしょう。

鎖国により遠洋航海技術が未発達だった江戸期、沿岸の地形を頼りに運行する廻船の多くが、暴風雨に遭遇し沈没したり破船となったそうです。幕末期にアメリカなどの捕鯨船が日本近海に多数現れるようになり、多くの日本人漂流船員を救助したという記録からみても、それまでどれだけ多くの人々が、天気の子測ができずに犠牲になったかがわかると思います。

観天望気の中でも、気象学的に信頼性が高そうなのは、やはり雲にまつわるものでしょうか。山に笠雲がかかったら雨、レンズ雲が出たら風が強くなる兆しなどは、それぞれ下層での湿度の増加や上空の風が強まっていることを示唆するものです。

また、夕焼けに関しては、雨か晴れか半々にわかるようですが、上層にある巻雲の広がり具合などで判断すれば、的中率が上がるという話もあります。

動物に関するものは、空の現象に負けにくいらいあり、たとえばツバメが低く飛ぶと雨などは、よく知られたものではないでしょうか。これにはきちんとした理由があり、雨の前に湿度が増加すると、ツバメの餌となる昆虫の活動が活発になることに関連しているのだそうです。

こうした観天望気にまつわる話は、全国に数多く残されており、現代ではさまざまなサイトなどで、全国の観天望気の伝承を知ることができます。